

3954TとOA発症の関係が $p=0.0007$ で有意を示した。また、OA発症には複数の遺伝子多型が関連している可能性が示唆された。

今後、顎関節OA患者および健常者における、OA関連遺伝子多型

IL-1 β C3954Tの発現率を比較検討するとともに、複数の遺伝子多型の検索を行う予定である。なお、DNAは頬粘膜SWAB法を用いて抽出する予定である。

北海道医療大学歯学部附属病院における悪性腫瘍入院患者の臨床統計的観察

○富岡 敬子*, 柴田 考典*, 有末 眞**, 武藤 壽孝*, 永易 裕樹**, 平 博彦**, 村田 勝**, 奥村 一彦*
*北海道医療大学歯学部口腔外科学第1講座, **北海道医療大学歯学部口腔外科学第2講座

【目的および方法】北海道医療大学歯学部附属病院病棟が、1980年6月2日に24床で使用開始されてから2004年12月末までの24年間に入院した悪性腫瘍患者87例を対象に性別、年齢、紹介の有無、年間当たりの症例数、合併疾患、原発部位、組織型、TNM分類、治療、予後について調査・報告した。

【結果】1. 性別は男性57例、女性30例。2. 年齢は28歳から89歳で平均は64.5才であった。3. 紹介の有無は、紹介「あり」78例(89.7%)に対し「なし」9例(10.3%)で、「紹介」78例の内訳は、歯科診療所42例、他歯科口腔外科13例、医科診療所6例、院内4例、不明13例であった。4. 年間当たりの症例数は1~6例で、最頻値は3例であった。5. 合併疾患は58例(66.7%)でみられ、循環器疾患24例、代謝性疾患18例(糖尿病12例、高脂血症6例)、肝疾患7例、呼吸器疾患6例、脳血管障害5例、消化器疾患と他臓器癌各3例であった。6. 原発部位は「舌」32例、「歯肉」32例、「口底」9例で、以下、「頬部」「口蓋」各4例、「耳下腺」「その他」各2例、「上顎洞」「口腔粘膜」各1例であった。7. 組織型は87例

中、扁平上皮癌70例、腺癌5例、悪性リンパ腫4例、悪性黒色腫2例、粘表皮癌2例、不明4例であった。8. 治療は74例に実施し、外科療法64例(うち化学療法併用が46例)、化学療法単独8例、放射線療法単独と放射線と化学療法の併用が各1例であった。9. TNM分類: 扁平上皮癌70例中、一次症例は64例で、そのうちTNM分類を判定した症例は46例(71.9%)であった。その内訳は「T2」23例、「T4」11例、「T3」7例、「T1」5例、いずれも「N0M0」が最も多く、それぞれ21例、6例、4例、5例であった。なお、TNM分類を判定しなかった18例中17例は、1992年以前の症例であった。10. 予後: 扁平上皮癌一次症例でTNM分類されている46例中、治療を行った43例では、2004年12月末時点で生存23例、死亡14例(原病死7例、他病死4例、不明3例)、不明6例で追跡率86%であった。なお、1994年から1999年までに外科治療を行った20例では、術後5年経過時点で生存13例、死亡7例(原病死3例、他病死4例)で、追跡率は100%に向上していた。

臨床実習における本学CT装置の活用状況

○佐野 友昭*, 細川洋一郎*, 大西 隆*, 田中 力延*, 飯沼 英人*, 南 誠二**, 篠崎 広治***, 金子 昌幸*
*北海道医療大学歯学部歯科放射線学講座, **みなみ歯科医院, ***しのぎき歯科医院

【目的】平成15年10月、本学にCT装置が導入されてから1年以上が経過した。CT導入の目的としては臨床的活用が主であるが、その他に研究的活用と教育的活用も忘れてはいけない。特に、教育的活用として歯学部学生に装置の構造、検査手順、そして、画像の読影を理解してもらうことは臨床教育上重要であると考えられる。今回我々は、平成16年歯学部臨床実習生に初めてCT撮影実習を導入したのでその活用状況について紹介することを目的とした。

【方法】対象は平成16年度臨床実習の歯学部5年生である。CT実習は木曜日の午前中に行った。撮像は断層厚2mm、管電圧140kVp、管電流130mA、撮像方式はガントリー0度のスパイラルを基本としたが、撮像上アーチファクトを避ける目的で任意の角度にガントリーを傾斜させるコンベンショナルな単純CTも行った。撮像実習に際して以下の点について配慮した。1) 被験者全員に承諾書

を作成した。2) 撮像範囲は必要細小範囲とした。3) 撮像した写真は個々の班内だけで使用した。4) 臨床上必要であるなら貸し出しを行った。

撮像終了後、必要であるなら再構成画像を作成し、写真をプリントアウトした。CT写真は他の画像写真と比較し読影に供した。

【結果】実習期間中に撮像された被験者は実習参加者90名(男性69名/女性21名)中、23名(男性21名/女性2名)であった。1班当たりの平均は2.7名、1班で最高4名、最低1名であった。部位別では上顎洞12件、上顎智歯2件、下顎智歯12件、顎関節1件であった。

【考察】臨床実習におけるCT実習は、装置の構造や検査手順の理解、そして他の画像検査(回転パノラマ、デンタル写真)と比較することで病態の本質を理解するうえで必要であると思われる。

授業を通じた医療事故防止対策の取り組み

○大山 静江*, 小田島千都子*, 沢辺千恵子*, 岡橋 智恵*, 長田 真美*, 五十嵐清治***
*北海道医療大学歯学部附属歯科衛生士専門学校, **北海道医療大学歯学部小児歯科学教室

【目的】平成15年12月に厚生労働省より「厚生労働大臣医療事故対策緊急アピール」が発出されて医療安全は医療政策の最重要課題の

ひとつに位置づけられた。そこで本校では、学生の事故防止に対する意識を高めることを目的として授業の中でヒヤリ・ハット(イン

シデント)の調査やアクシデントとヒヤリ・ハット事例検討を実施している。

【方法】対象学生は平成15年度第2学年45名と平成16年度59名である。方法は学生の事故報告レポートやヒヤリ・ハットレポートを調査し集計した。事例検討の授業は5月と8月に実施し、5月は過去に多くあった典型的な事例を取り上げ検討した。8月はこれまで学生が経験したアクシデントやヒヤリ・ハットの事例を検討し、企画・進行は学生が主体となる一部参画型の方法で実施した。平成16年度はこの方法に加え、15年度のアクシデントとヒヤリ・ハットの集計結果を学生に提示した。また臨床実習指導者に対しても臨床実習指導者懇談会にて結果を報告し、ヒヤリ・ハットやアクシデントの再発防止を依頼した。

【結果および考察】ヒヤリ・ハットとアクシデントは15年度、16年度ともに上半期より下半期が減少した。また15年度より16年度の方

がヒヤリ・ハット、アクシデント共に減少した。ヒヤリ・ハット報告が減ったことは直ちに安全につながるわけではない。しかし学生の提出レポートによると、授業を行ったことにより医療事故防止に関心を持つなどの反応を示し、自主的活動の動機づけになっていることが示唆された。

一方、アクシデント、ヒヤリ・ハットの内訳は器具洗浄が一番多く、それ以外の内容については15年度、16年度ともに異なる傾向であった。これは前年度の結果を16年度の学生に提示したことにより注意を喚起したことや指導者側の支援も大きいことがあげられた。

さらに学校側で安全なシステムを構築していくことが重要と考え、「事故処理型」から「事故防止型」の姿勢へと変換し、ヒヤリ・ハットや事故防止対策を考察できる環境づくりが必要と思われる。

歯科医療問題研究会活動報告 一第二報一

○本田 睦子*, 鈴木 真野**, 澤田 有希**, 鈴木 りな**, 村井 雄司**, 大友 栄二***, 伊藤 昭文****, 水谷 博幸*****, 松本 大輔*****, 関口 五郎*****, 道谷 弘之*****, 五十嵐清治*****, 他部員一同
*北海道医療大学歯学部附属歯科衛生士専門学校1年, **歯学部5年, ***歯科保存学第2講座, ****口腔外科学第1講座, *****口腔衛生学講座, *****小児歯科学講座, *****東京都立心身障害者口腔保健センター, *****苫小牧青葉病院歯科・口腔外科

【目的】昨年の本会では、第一報として我々歯科医療問題研究会(医療研)の発足から現在に至るまでの活動について報告した。そこで今回は、知的障がい者施設における口腔内診査補助やPlaque Control Record (PCR)を利用したブラッシング援助の経験より、今後のこれらの結果や補助態勢の経験を基に、クラブとしての社会福祉活動のあり方を検討した。

【活動内容】新篠津村にある知的障がい者授産施設F苑に入所および通所している74名(男性47名,女性27名),平均年齢:32.6歳を対象に口腔内診査補助とブラッシング援助を行った。

【結果および考察】当施設には年2回の歯科健診であるが、我々が実施するブラッシング援助は、清掃不良部位を指摘し改善を図らせることであった。反省点としては、知的障がい者についての知識が少ない状態で、健診に参加したことであった。普段の調子で援助をしたのでは相手には伝わらないことがあり、言葉でいくら言っても理解してもらえないことがあった。しかしながら、言葉が通じなければ手を添えて、言葉も掛けながらコミュニケーションをとることで、少しずつ気持ちを伝えることが出来た。「歯を磨いているところ

を、見られるのが恥ずかしい」と訴えて、しきりに隠したり、鏡を見ながらブラッシングすることに抵抗を感じるという声もあった。この気持ちは勉強会で実際にブラッシング援助を行ったときに、我々が感じた気持ちそのものであり、少なからず、自分たちが感じたことは、他人も感じているということがわかった。コミュニケーションで一番大切なことは、自分が相手に興味を持って接することではないかと思っている。それは、今回の健診だけでなく、いろいろな場面で言えることである。深入りするのではなく、初対面の人に対してどんな人なのか興味を持つことで、その気持ちが何らかの形で相手に伝わり、警戒心を解いてくれることがあるからである。楽しく、規則に縛られすぎず、歯科健診を楽しんでもらうように心がけた。

今回の健診では受診者の方々と良い信頼関係が築けた。当然それには、必要な知識があれば、より良い時間が過ごせたことも事実である。

今後この経験を踏まえて、障がいを持つ方とそうでない方の区別することなく歯科医療に従事したいと考えている。

歯科インプラント専門外来スタッフのBLSとACLS研修 一歯科診療室における突然の心停止に対する最初の10分間の蘇生処置一

○工藤 勝*, 大桶 華子*, 北所 弘行**, 平 博彦**, 細川洋一郎***, 新井田 淳****, 國安 宏哉****, 廣瀬由紀人****, 越智 守生****
*北海道医療大学歯学部歯科麻酔学講座, **口腔外科学第2講座, ***歯科放射線学講座, ****歯科補綴学第2講座

【目的】北海道医療大学歯学部附属病院(本院)の歯科インプラント外来(当専門外来)の患者は痛くなく安心・快適な治療を強く求めている。本院手術室では歯科麻酔科医が生体情報モニター監視、亜酸化窒素(笑気)吸入・静脈内鎮静法の適応と局所麻酔注射を実施し、口腔外科医と補綴科医が手術を行い入院管理も実施してい

る。当専門外来発足2年目を機に、歯科医療の安全推進を目的として、患者急変時のチーム医療としての対応法、すなわち二次救命処置(ACLS)の研修を独自に開始したので、その概要を報告する。

【方法】当専門外来スタッフ(歯科医師)のACLS研修コースは、AHA CPR&ECC G2000に則って本邦で開催されているACLS基礎